「日々の理科」（第 1973 号） 2019, 12, -3

「小石川植物園の新しい温室（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

小石川植物の新温室は、入園者が鑑賞することが第一の目的ではなく、植物学の研究用に設置されている。従って、建物全体を熱帯地方のようにして、入館者がその環境に入ったような体験ができるわけでもない。温室内のほとんどの植物は、移動・研究に便利なように「鉢植え」である。

展示されている植物も、特別なものではなく、その地域に普通に自生しているものが多い。分類別ではなく、奄美・沖縄、小笠原、台湾、東南アジアなど、地域別に展示されているのがわかりやすい。写真は「リュウキュウウマノスズクサ」（琉球馬の鈴草）で、奄美から沖縄本島にかけて自生している植物である。

展示されている鉢植えには、すべて「学名、和名、科名、生息地」が付されている。そのほかにも研究や観察の「履歴」もある。この札には、2016～2017 年は結実がなかったが、2018 年には１個実がなったとある。

私は 47 都道府県では沖縄県だけ旅行したことがない。しかし奄美は訪ねたことがある。その時に見た植物にまた出会えてうれしかった。これは「クワズイモ」（食わず芋）の仲間で、奄美の日本画家・田中一村（たなかいっそん）が好んで描いた題材である。

これは「ヒカゲヘゴ」という、樹木性のシダ植物。これも奄美大島の山間部でよく見かけた。なつかしくて、鉢ごともらって帰りたかった。